

## 【資料紹介】葛飾北斎の『絵本隅田川兩岸一覽』について 一描かれた隅田川の名所を読み解く一

朴 美 姫\*

### 目 次

はじめに

- 1 『絵本隅田川兩岸一覽』の概要
- 2 北斎が描く「隅田川」
  - (1) 上巻（高輪～両国広小路）
  - (2) 中巻（両国橋～大川橋）
  - (3) 下巻（浅草寺～吉原）

おわりに

キーワード 葛飾北斎 浮世絵 隅田川 狂歌絵本 名所絵

### はじめに

隅田川は『類聚三代格』承和2年（835）の格にある「住田河」という表記が初出とされ<sup>1)</sup>、『伊勢物語』<sup>2)</sup>や「隅田川物」<sup>3)</sup>に謡われるなど、江戸の「名所」として親しまれてきた。後に江戸の名所が絵画化されるようになると、隅田川はそれらの物語と共に絵画の必須のモチーフとして取り上げられ、特に浮世絵においては隅田川周辺のあらゆる場所が画題として描かれるようになった。そのような中で、隅田川を含む江戸の名所はその場所が最も魅力を発揮する季節と結びつくようになり、絵においてもその季節で描かれることが多くなっていることがわかる。

本稿で紹介する狂歌絵本『絵本隅田川兩岸一覽』（当館所蔵番号13200063～13200065、以下「当館本」）【口絵1】も隅田川沿岸の名所を春夏秋冬の各季節の変化に合わせ、江戸の風物詩と隅田川の風景を結びつけた作品である。『絵本隅田川兩岸一覽』は葛飾北斎が手掛けた数々の狂歌絵本の中でも『画本狂歌 山満多山』、『東遊』、『東都名所一覽』とともに四大風景集として位置づけられ<sup>4)</sup>、北斎の狂歌絵本を代表する作品としてしばしば取り上げられてきた。しかし先行研究を俯瞰してみると、制作及び刊行年代の問題、そして描かれた四季の風物詩については幾度となく指摘されているものの、北斎の描く景

\*東京都江戸東京博物館学芸員

色が実物の景色にどの程度基づいているか、あるいは北斎が描く作品とどのような相違または類似点が認められるかなど、描かれた主題そのものの詳細な内容についてはいまだ考察されていない<sup>5)</sup>。

以下小稿では、諸先学の研究を踏まえながら、『絵本隅田川兩岸一覽』全3巻について改めて絵の内容を詳細に分析することを試みたい。そのため絵地図を用いて『絵本隅田川兩岸一覽』に描かれた隅田川流域を確認し、北斎が描いた隅田川の景観について検討する。これにより北斎が隅田川流域の景観を四季それぞれの風物と組み合わせ、限られた画面に取り入れるためどのように意図し、工夫したかについて改めて考察することが可能になるのではないかと思う。

## 1 『絵本隅田川兩岸一覽』の概要

『絵本隅田川兩岸一覽』<sup>6)</sup> (大本3巻3冊) は版本の形式をとりながら見開きの各場面はそれぞれ完結し、また前後の場面とつながっているため、各場面を並べてみると、絵巻物のように長く連続する画面となる点が大きな特徴である(【参考図版】『絵本隅田川兩岸一覽』参照)。図の手前に描かれる西岸(現中央区、台東区)には人物を中心に行楽の場としても人気のあった隅田川沿いの賑わいを描き、遠景の東岸(現江東区、墨田区)は風景画として穏やかに展開させ、兩岸の様子を詳細に描いている。橋崎宗重氏は、このような構成について、北斎の『絵本隅田川兩岸一覽』は鶴岡蘆水筆の「隅田川兩岸一覽」(天明元年(1781)、当館蔵)【図1】に倣ったものと指摘しているが<sup>7)</sup>、仲田勝之助氏によると蘆水の『隅田川兩岸一覽』が隅田川の風景を主題に東岸と西岸をそれぞれ2巻に描き分けているのに対し、北斎は東岸と西岸の様子を一つにまとめ、風俗と人物を描くことに重点を置きながら人物が風景の中に自然に収まるように描いていること、また前述したようにそれぞれの見開きの絵が各場面ごと完結していると同時に絵巻物のようにも展開できるように構成しているなど、その違いを指摘している<sup>8)</sup>。

冒頭には、壺十楼成安<sup>9)</sup>による次のような序文が掲げられている。(以下、原本からの引用、下線、句読点は引用者、「/」は改行を示す)。

一段風光画不成とは、山水の美景を賞る/に似たりといへとも、もとより筆不性のいひ/出せる成へし、こゝに北斎ぬし図画に工にし/て、しかも筆とるわさのまめまめ敷あまり、/此頃隅田河兩岸の勝地を模写せり。其図/中微細にしてた、ちに景地に至れるか如/し。実に東都の風光正写しといはまし/納涼のかた出る処をみれハ忽ち南風薫り/て三伏のあつさをわすれ雪のあした/の景色には炉に楳



【図1】 鶴岡蘆水「隅田川兩岸一覽」 天明元年(1781)(当館蔵 83200123)

くへて酒あたゝ／めむ事をほりす嗚呼奇哉。此筆を／もてうつさは、万物ミなまさに写さゝら／めやはとしきりに感賞す。折から仙鶴堂／のあるし来りて、是に戯歌そへたらん／はいかにとそゝのかす儘、やかて酒友と会して／談し侍れハ、わらひ上戸のあらはあれ、／酔狂仲間の底ぬけ同士、玉の妙画に／砂利の哥、千代と口取にそゆるになむ。猶／味酒の名によりて隅田川兩岸一覽と／題して酔さめのひや水もひさくといふを／ことほきて、書林のもとめにしろき鳥／しら紙ひとひら染るになむ。

壺十楼 成安<sup>㊦</sup><sup>㊧</sup>

序文には「仙鶴堂のあるじ」とあり、地本問屋、鶴屋喜右衛門が版元であることが確かめられる。どのようにして壺十楼成安が北斎の絵を目にしたかは明らかにされていないが、序文によると、壺十楼成安が絵を見ていた際、仙鶴堂の主人鶴屋喜右衛門から絵に狂歌を添えることを勧められ、その勧めに壺十楼成安が仲間を集め狂歌を添えたことがわかる。また本作品は47人の狂歌師によって各図に題と狂歌が添えられているが【表1】、うち6図（「大橋の綱引 元柳橋の子規」、「両国納涼 一の橋弁天」、「新柳橋の白雨 御竹蔵の虹」、「大川橋の月 小梅の泊船」、「待乳山の紅葉」、「白鬚の翟松 今戸の夕烟」）については、狂歌の内容と描かれた画題が一致せず、また絵に題や狂詠の要素を描く部分が次の見開きにわたることも先学の研究によって明らかになっている<sup>10)</sup>。

当館本は上冊が全9丁、中冊は8丁半、下冊が7丁半となっているが、当館本のほか、奥付や刊記を備えた初印本は見出されておらず、先学の研究によって享和元年（1801）、文化3年（1806）と提示されているが、制作及び刊行年については未だ確定していない。

刊行年または画稿の成立の間に時間差が生じているとも指摘されていることから<sup>11)</sup>、先に北斎の画稿が成っていたものが、文化元年（1804）5月17日根岸肥後守による色摺禁止の影響を受け、版元の鶴屋がしばらくの間保存し、後に色摺絵本の咎めが厳しくなくなると鶴屋が入銀してくれる人々を求め、その目処が立ったところで改めて刊行を実験したことが想定される。また、新たな見解として、壺十楼成安をはじめとする多くの狂歌師の活動時期やその狂名の使用時期、そして狂歌47種のうち25種の狂歌および狂名が入れ木であるという板木の問題から、文化10年（1813）、あるいは13年（1816）に刊行したという説も提示されている<sup>12)</sup>。

現在、大坂の前川善兵衛版<sup>13)</sup>が確認されていることから、江戸を起点として大坂まで出版元が転々としたこと、また、国内と国外に20本以上の伝存が推定される<sup>14)</sup>ことや版摺りの違いが多く見られることから、当時絶大な人気を博していたことが想定される作品である。

## 2 北斎が描く「隅田川」

本章では『絵本隅田川兩岸一覽』の見開きの全24図について、絵地図と描かれた場所の位置関係を確認し、北斎が限られた画面に隅田川をどのようにとらえ、各名所と結びつく風物詩をどのように組み合わせ表現したかについて考察を行いたい。

(1) 上巻 (高輪～両国広小路)

① **高輪の暁鳥** 不峯の積雪【図2】

『絵本隅田川兩岸一覽』は大きくカーブした海岸線を背景に、太陽が空を赤く染め始める頃の「高輪」の図からはじまる。図には江戸府内の出入口として海道に築かせられた石垣が大きく描かれ、牛車、旅合羽に身をくるませた旅人など、高輪の定型化された画題が多くみられる。

ここで注目しておきたいのは遠景である。遠景は雪の積もった富士と大船を合わせて描いた繰り返しの三角構図となっている【図3】。弁才船は北斎がよく描いた画題の一つとして、「百人一首乳母が絵説藤原繁行朝臣」や「富嶽三十六景 上総ノ海路」などにも主題として描かれるなど、高輪を描く図には必ずと言ってもいいほど取り上げられる画題である。

図のように富士と船が作り出す三角の構図は、寛政11年(1799)春に刊行された『東遊』の「佃白魚網」【図4】に酷似していることが確かめられ、船の向きは異なるものの、大船の帆柱と身縄が作り出す三角、そして遠景の富士、大船の右手にある小船までも類似し、影響が認められる。



【図3】『絵本隅田川兩岸一覽』(部分図)  
(当館蔵 13200063)



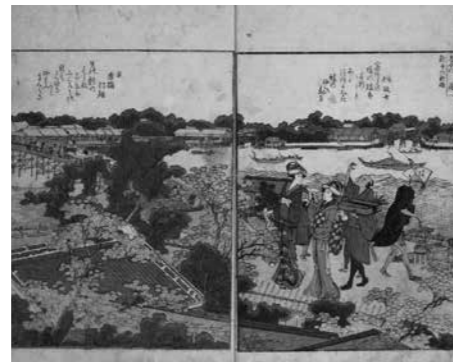
【図4】浅草市人/撰 葛飾北斎/画『東遊』  
(当館蔵 87201158)

ここで絵地図【図5】(絵地図にみる『絵本隅田川兩岸一覽』①参照)で位置関係を確認してみよう。図のように高輪大木戸から品川方面を望むと富士は左側に位置するため、描かれたこの角度から富士は見えないはずである。しかし北斎は、隅田川の兩岸と四季を合わせた風物詩を限られた画面に取り入れるため、描かれた角度からは見えないはずの隅田川の景勝を組み合わせて描いたことが他の図からも確認され、本図における富士もその意図を持って描かれたと思われる。特に広重の作品と比較すると一目瞭然である。「東都名所 高輪全図」【図6】「東都名所之内 高輪廿六夜之図」、または「東都名所 高輪月之景」や「江戸名所 高輪廿六夜」など、広重のみならず歌川派が描く高輪の図に富士は描かれていないことが確かめられる。しかし本図以外の北斎の「阿蘭陀画鏡 江戸八景 高輪」【図7】や「風流東都八景 品川の帰帆」に富士が描かれていること、そして北斎に影響を受けた溪斎英泉<sup>15)</sup>の「蘭字梓江戸名所 江戸高縄の景」【図8】や北斎の弟子、昇亭北寿の「東都 品川宿高輪大木戸」に「富士のある」高輪の図がみられることから、高輪の図の粉本が存在していたと考えられる。

【参考図版】『絵本隅田川兩岸一覽』



元柳橋の子規 大橋の綱引 【図14】



新寺の新樹 市中の花 【図13】



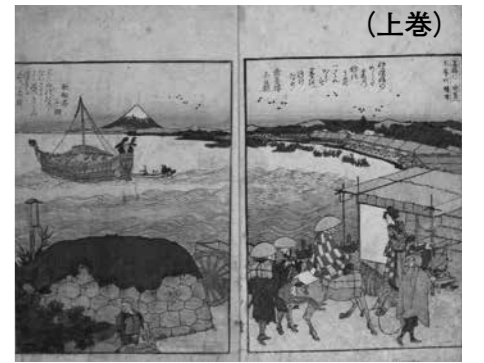
永代春風 三俣の白魚 【図11】



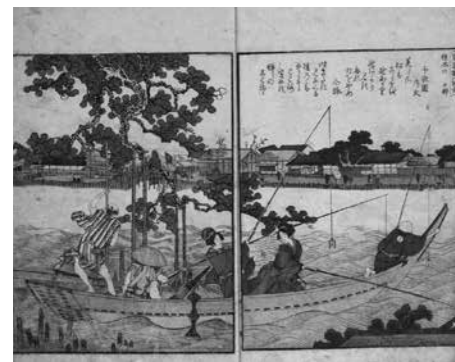
築地の凧 佃住吉恵方 【図10】



房総 春暁 旭 元船乗初 【図9】



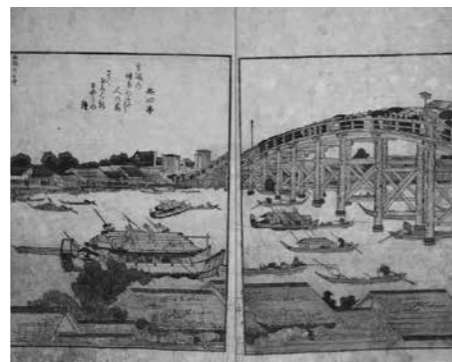
不峯の積雪 高輪の暁鳥 【図2】



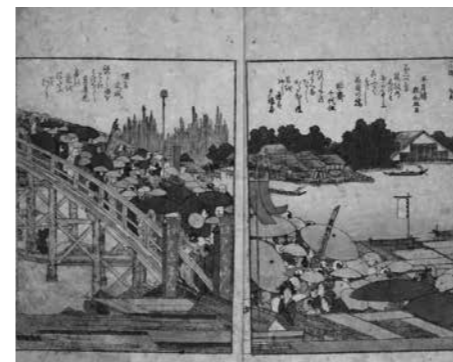
椎木の夕蟬 首尾松の鉤舟 【図24】



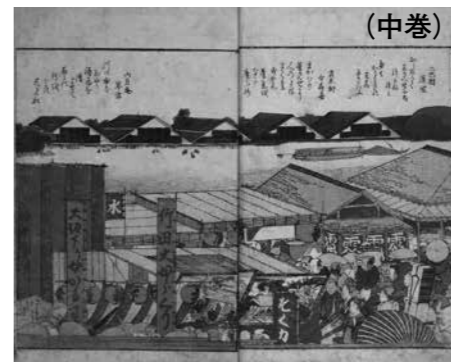
御竹蔵の虹 新柳橋の白雨 【図22】



無縁の日中 【図20】



一の橋弁天 両国納涼 【図19】



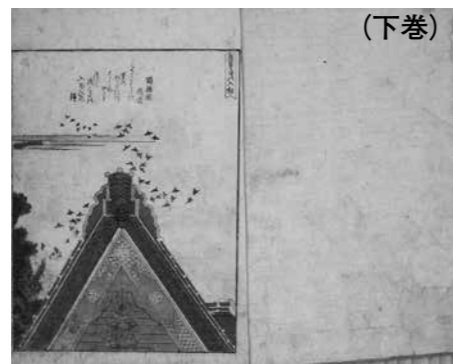
其二 【図17】



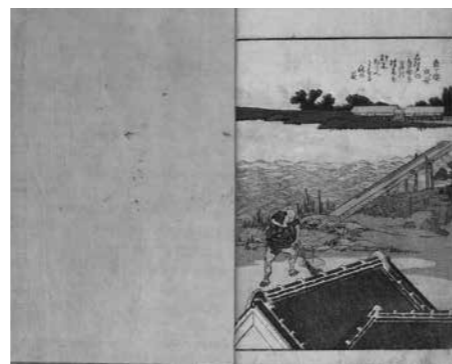
御船蔵の蝸 広小路の群集 【図16】



花川戸の参籠 向島の時雨 【図33】



浅草寺の入相 【図31】



其二 【図30】



小梅の泊船 大川橋の月 【図29】



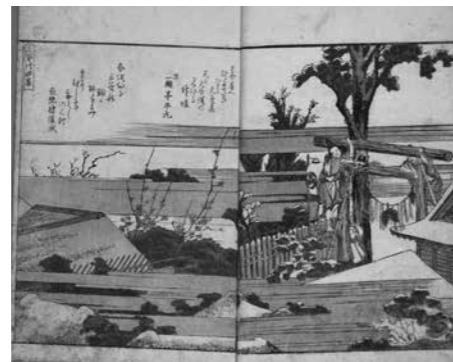
多田薬師の行雁 駒形の夕日栄 【図27】



御馬屋川岸乗合 榎寺の高灯籠 【図25】



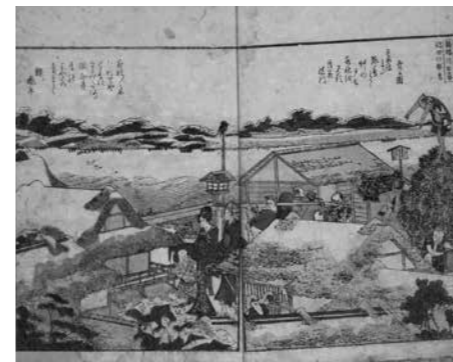
吉原の終年 【図45】



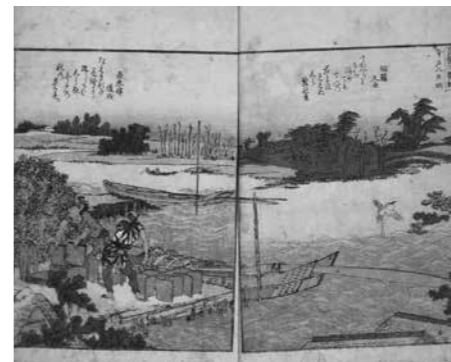
三谷の田家 【図43】



木母寺の鉦鼓 真崎の神燈 【図42】



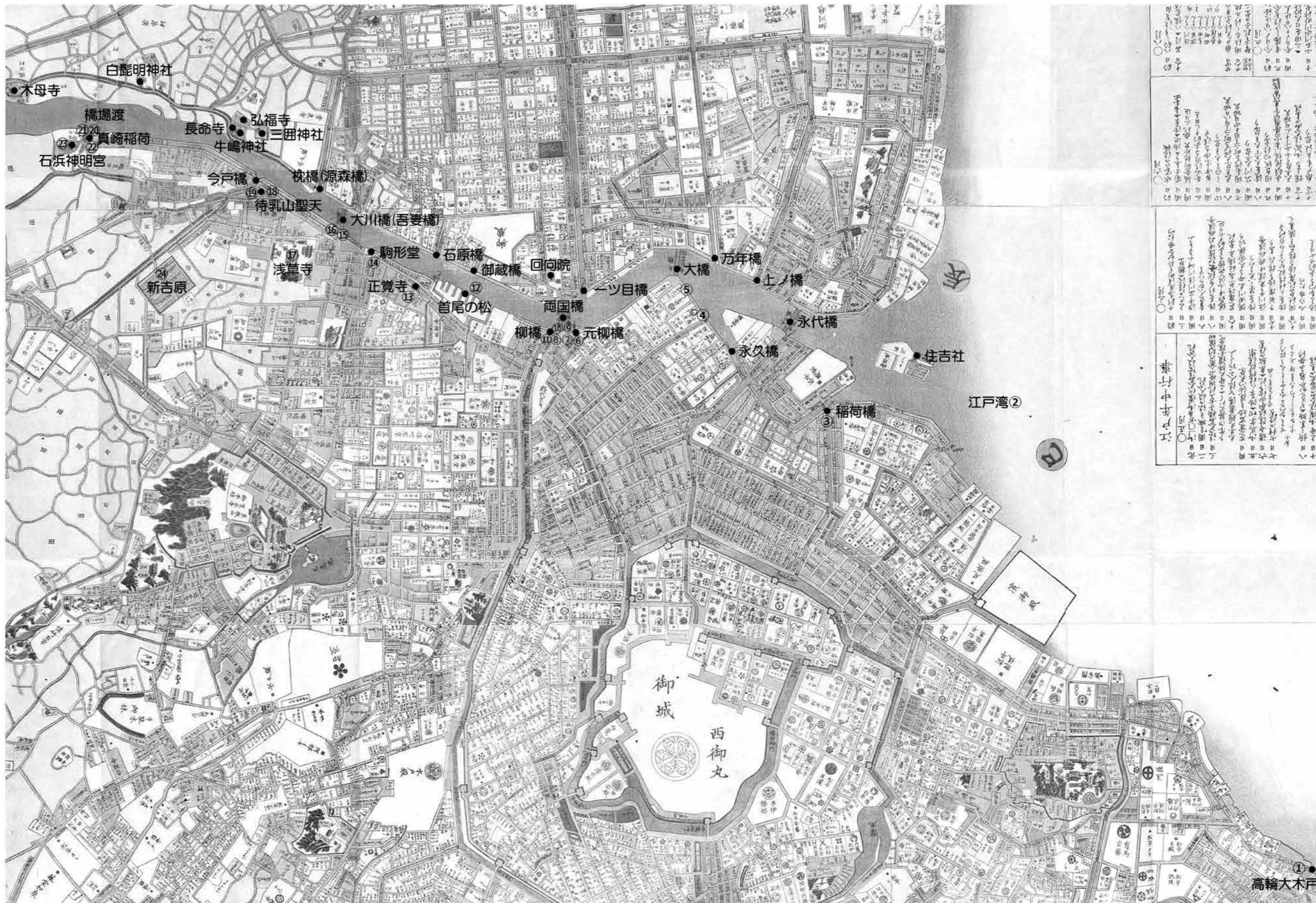
隈田の都鳥 橋場の田家 【図37】



今戸の夕烟 白髭の翟松 【図36】

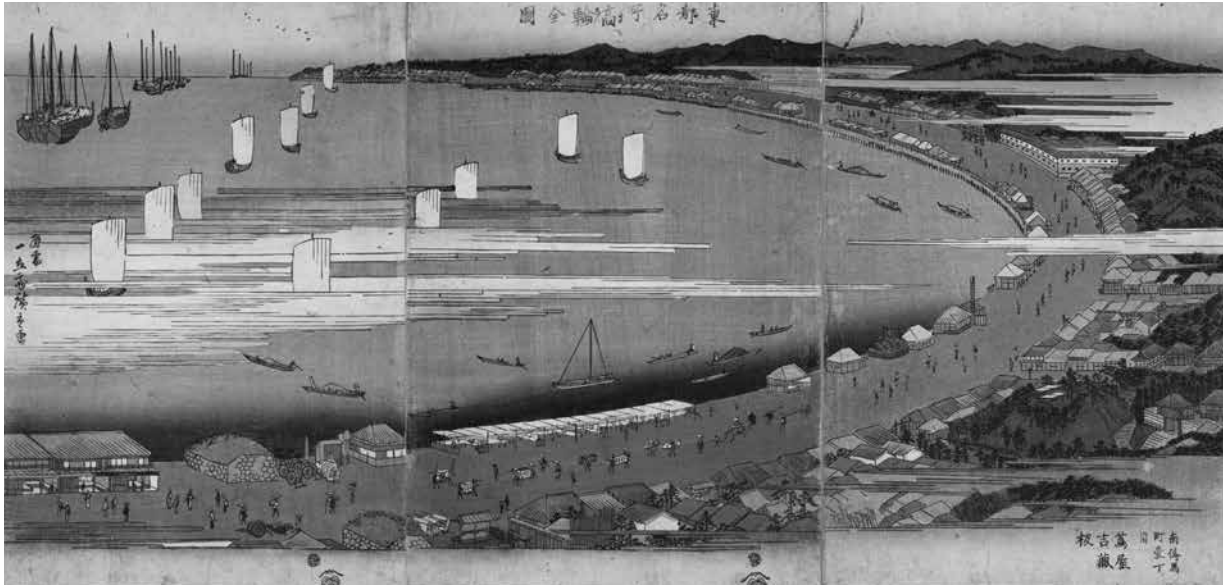


待乳山の紅葉 【図35】



※原図：「天保改正御江戸大絵図」（当館所蔵資料番号 86213222）を元に作成。

【図5】 絵地図にみる『絵本隅田川兩岸一覽』



【図6】 歌川広重「東都名所 高輪全図」(国立国会図書館)



【図7】 葛飾北斎「阿蘭陀画鏡 江戸八景 高輪」  
(当館蔵 90207385)



【図8】 溪斎英泉「蘭字粹江戸名所 江戸高輪の景」  
(当館蔵 90207443)

② 旭 元船乗初 房総 春暁【図9】

遠方に房総半島を望みながら、手前に渡船を描く図である（【図5】②参照）。江戸湾には弁財船を配して茫々とした景観の余白を見事にまとめあげている。船には大きな煙草入れをぶら下げた船頭が2人描かれ、袴姿の侍、町人、棟梁、子供連れの女房、振袖姿の娘など、さまざまな風俗を見いだすことができる。

渡船の左から3人目の男が着ている半纏には赤い丸に「恵」という字がみえる。新しい年の歳徳神のいる方向のことを恵方と言い、その方位にある神社に初詣することを恵方詣とすることから、図の男は初詣に行く様子であることが想定出来る。

左上には後図につながる凧が描かれているが、完結した場面としては少々不自然である。あえてこの図に凧を用いたのは、後図に描かれる「住吉神社」とのつながりを示そうとしたのではないかと考える。

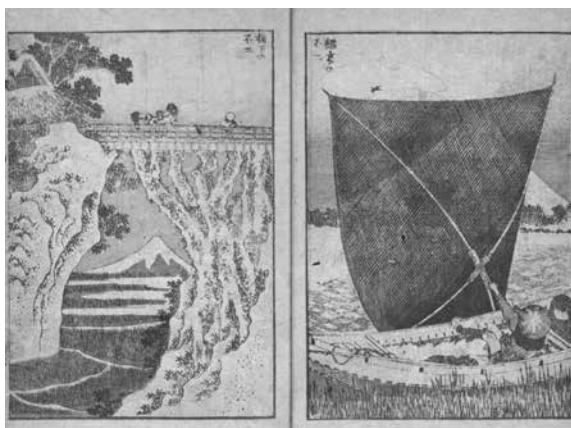
③ 佃住吉恵方 築地の凧【図10】

手前にはすやり霞に覆われた稲荷橋を、遠景には佃島を描く図である。凧を揚げる2人の子供と三河万歳の姿から正月の雰囲気を感じさせる場面となっている。袖凧と角凧は「富嶽三十六景 江都駿河町三井見世略図」にもみられ、凧の糸を用いて見事に空間を構成していることがわかる。本図にも、空高く飛ぶ二つの凧で画面の単調さをさけ、そのうちひとつの凧を前図に描くことによって空間的な広がりを感じさせる構図となっている。

絵地図（【図5】③参照）で確認してみると、遠景の佃島は実際には稲荷橋から見て右側に位置するため、橋をやや正面に配したこの角度からは見えないはずである。しかし北斎は稲荷橋の上に赤色のすやり霞を用いることで同一の画面に複数の場所を共存させ、手前の稲荷橋から遠景の佃島へと自然な形で視点を遷移させようとしている。では、なぜ佃島を本図に用いる必要があったのか。佃島を見ると、屋根の千木が特徴的な住吉神社が描かれている。つまり前図の渡船に乗っていた初詣をする人たちの行き先が佃島の住吉神社であることを本図において示し、前図とのつながりをより自然にみせるための工夫だったことがわかる。

④ 三俣の白魚 永代春風【図11】

三俣付近から永代橋を眺める光景である（【図5】④参照）。右側の「正一」のぼりの鉄砲洲稲荷神社からもわかるように、様々な視点から見た景色を一つの画面に取り入れた図である。まず、鉄砲洲稲荷神社は前図にあった稲荷橋の南詰にあるため、实景に基づいて描くのであれば前図に用いるのが位置的には正しい。しかし北斎は前図と同様に霞を稲荷神社の下部に配し、同じ画面の中に2つの場所を存在させようとしている。本図に意図的に鉄砲洲稲荷神社を用いたのは、太鼓売りや白魚とりの四つ手網を引き上げる姿からもわかるように、稲荷神社の祭礼に参詣する初午参りを風物詩として取り入れるためであると考えられる。



【図12】 葛飾北斎『富嶽百景』3編「網裏の不二」  
(国立国会図書館)

四つ手網を引き上げる漁師の姿は、『富嶽百景』3編の「網裏の不二」【図12】、「千絵の海 総州利根川」、『伝神開手 北斎漫画』初編にも共通するものがみられ、北斎が好んで用いていた画題であるが、この画題は北斎のみならず寛政期以降に活躍した喜多川歌麿、勝川春扇、歌川広重らの作品からも同様な絵柄が見受けられることから、各時期を通して浮世絵師によってよく用いられていた画題だったことがわかる。

⑤ 新寺の新樹 市中の花【図13】

新大橋付近から遠景の万年橋、上ノ橋を眺める図である（【図5】⑤参照）。満開の桜を背景に初鰯が入っていると思われる箱を手にした人、甘茶をかける仏様のお厨子を持った人など、初夏の代表的な風

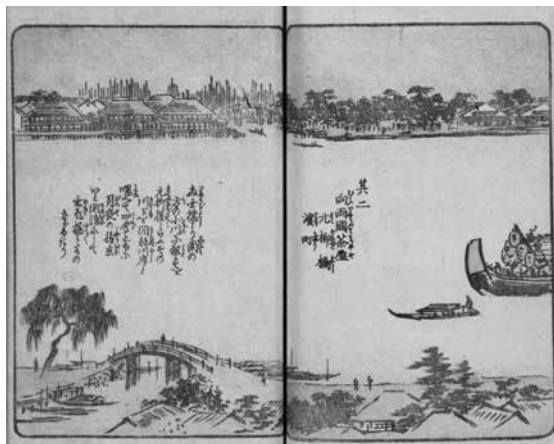


物を用いていることから、4月の様子であることがわかる。

手前に大きく描かれた人物の背後にはやや小さく描かれた3人の男性が隠れるように描かれ、さらに奥の新大橋付近の人々と対比をさせる効果を狙っていることが見てとれる。遠近法に対する未熟さはあるものの、限られた画面の中で距離感を表そうとした北斎の工夫がみられる図となっている。

⑥ 大橋の綱引 元柳橋の子規【図14】

中央には元柳橋を大きく捉え、遠景には新大橋を描く図である（【図5】⑥参照）。絵地図で確認すると、このように元柳橋から新大橋を眺める場合、新大橋は縦長に見えるはずだが、北斎は前図とつながる新大橋を本図に取り入れるため、新大橋の構図を変えていることが確認できる。視点を新大橋において



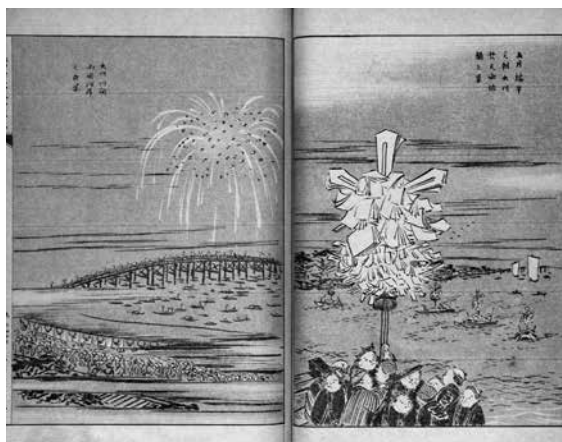
【図15】 歌川広重『絵本江戸土産』6編  
(当館蔵 86213049)

ているため、手前の元柳橋をやや斜めに描いたこと、そして『絵本江戸土産』の「向両国茶屋 元柳橋 濱町」【図15】のように元柳橋の向かい側にある一つ目之橋もこの図には取り入れてないことがわかる。

元柳橋の上には大きな荷物を担ぎ欄干に腰かけながら扇子で暑さをしのいでいる男、その左側には大きな日傘を手にした芸者2人、そして尻端折の男は手をあげ何かを指している。緑台に描かれた浴衣を着た女性と子供の姿、そして人物らの着衣などにより初夏であることがわかる。

⑦ 御船蔵の蜃 広小路の群集【図16】、其二【図17】

本所御船蔵を望む両国広小路を横から捉えた図である（【図5】⑦⑧参照）。元柳橋の前には柳の木、そして川に沿って仮設の茶屋が並び、水売りや「竹田大からくり」、「大坂下り女かるわ（ざ）」の幟を立てた軽業の見世物小屋、貸本屋など、盛り場として賑わいを見せていた両国広小路の様子がよく表され、特に対岸に描かれた御船蔵によって静と動の対比が際立つ場面となっている。



【図18】 菊池貴一郎『江戸府内絵本風俗往来』  
上編 (国立国会図書館)

画面の左下には細長い紙片や布でつくった幣束を棒の先へ刺した梵天が描かれ、その周りには若い男の頭がみえる。梵天は若者たちが川で水垢離をした後、家々に配って魔除けとして使っていたもので、江戸時代には宮中行事としては簡素化されたが、庶民の間では盛んになっていたようで、寛政元年（1789）4月には、大きな梵天を大勢で担いで練り歩くことを自粛するようにとの町触れも出ている<sup>16)</sup>。

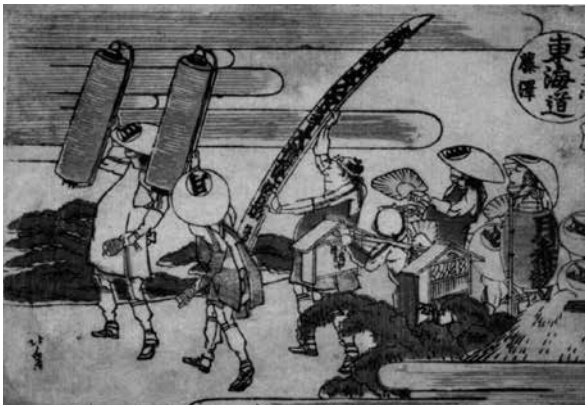
菊池貴一郎の『江戸府内絵本風俗往来』【図18】によると大川筋水垢離は端午の節句にするものことから、図は5月頃を意識して描いていると考えられる。

(2) 中巻 (両国橋～大川橋)

① 両国納涼 一の橋弁天【図19】、無縁の日中【図20】

大きくアーチを描く橋を中景に西の両国広小路から東岸を眺めた図である(【図5】⑨⑩参照)。両国橋は多くの見物人であふれ、花火を打ち上げる様子は見られないものの、川面には屋形船や屋根船の様子を描き、夏の両国橋の賑わいが感じ取れる。

遠景の右側に見えるのは豎川に架る一つ目橋で、その向こうには豎川岸に多かった材木置き場、そして一つ目橋の南詰め向こうにある建物は一つ目弁財天、その手前の川岸には水戸藩石置場が描かれ、左側には回向院と百本杭など隅田川一帯の広々とした空間を両国橋を中心に描いている。



【図21】葛飾北斎「東海道五十三次 藤沢 七」  
(当館蔵 90200165)

橋のたもとには紅屋の幟があり、その右側には「奉納大山石大権現」と書かれた大木刀が見えることから、北斎の「東海道五十三次 藤沢 七」【図21】にもあるように大山寺(阿夫利神社・現、神奈川県伊勢原市)に参詣に行く大山講の様子であることがわかる。修験道の寺刹として石尊大権現をまつっていたことから石尊参とも称された「大山参」は、江戸町人の間で治病をはじめとする様々な願いの成就を目的に大流行した。6月27日から7月7日までが「初山」、7月8日から同13日まで

が「相の山」、7月14日から17日までが盂蘭盆中のことで「盆山」と呼ばれていたことから、図は6月末から7月中旬の様子を描いたものであることが想定される。

② 新柳橋の白雨 御蔵の虹【図22】

柳橋から御蔵橋を眺める図である(【図5】⑪参照)。手前のやや斜めに描かれた柳橋によって視点を御蔵橋のある左側においていることがわかる。

橋の上には振り出した夕立に合傘や蓑をかぶって道を急ぐ男女の姿が描かれる。中央に大きく描かれた傘には貸傘屋の番号と見られる「千八百十番」という文字が記されているが、北斎が当時西暦を知っていたという仮説から、この1810という数字は本作の刊行年ではないかという見方も提示されている<sup>17)</sup>。

図の右側に描かれた3人の女性は、『略画早指南』



【図23】浅草市人/撰 葛飾北斎/画『東遊』  
(当館蔵 87201158)

にあるように、四角や円などの幾何学形状を組み合わせて描かれたもので、『画本東都遊』の「梅屋敷」【図23】にも同じく斜めに向けた傘の中に顔を隠している同様の人物がみられる。

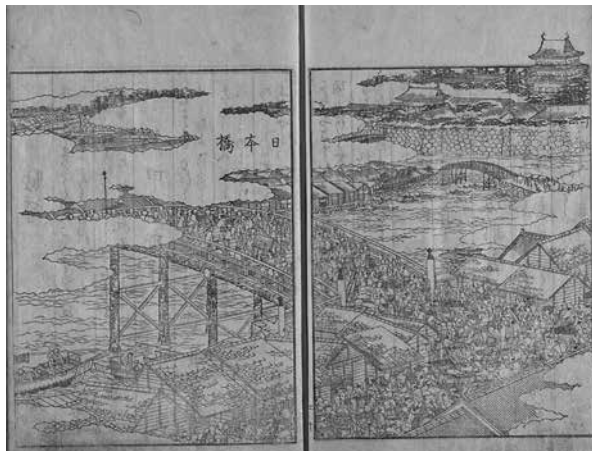
③ 首尾松の鉤舟 椎木の夕蟬【図24】

岸辺に並ぶ幕府の御米蔵の敷地から首尾の松近くで釣りを楽しむ様子を描いた図である（【図5】⑫参照）。御厩河岸上流は釣りが禁止されていたが、この付近は釣りの名所としても賑わっていたことから、浮世絵にも多く描かれた場所である。

隅田川に張り出すように生える松の曲線と、船で釣りに興じる女性たちの竿の直線が見事に対比している。対岸には北端の排水用水路の入口に架かる石原橋や辻番屋、三河国拳母藩内藤家の下屋敷を描き、右側の森は本所七不思議の一つに数えられる「落ち葉なしの椎」、肥前平戸新田藩松浦家の上屋敷がみえることから、北斎はやや上流に視点を置いていることがわかる。

④ 榎寺の高灯籠 御馬屋川岸乗合【図25】

正覚寺（榎寺）<sup>18)</sup>の東側にあった御厩河岸の渡から、渡船が向こう岸・本所をめざして動き出したところを描いたものである（【図5】⑬参照）。渡し船には網代笠の僧侶、御幣のようなものを肩に担いでいる神道者、そして鳥かごを前に長い竿を立てている鳥刺し（餌差し）など、さまざまな風俗が描かれる。



【図26】 浅草市人/撰 葛飾北斎/画『東遊』「日本橋」  
(当館蔵 87201158)

左側にある榎寺の高灯籠が、旧暦の7月半ばの盆灯籠として掲げられたものであることから、図は7月の様子を描いたものであると考えられる。この高灯籠と鳥刺しの竿は画面の枠をはみだすように描き、その高さを強調させているが、このような描き方は寛政11年（1799）に刊行された『画本東都遊』の「芝神明宮 春景」、「日本橋」【図26】、「浅草葦市」などにも用いられていることから、比較的早い時期から取り入れていたことがわかる。

隅田川の向こうには御厩河岸の渡しの船着場があり、絵地図で確認すると対岸は本所荒井町・番場町あたりで、船着場辺りの屋敷は、譜代大名である備後福山藩阿部伊勢守の下屋敷であると考えられる。

⑤ 駒形の夕日榮 多田薬師の行雁【図27】

駒形堂から大川橋（吾妻橋）を眺める図である（【図5】⑭参照）。図の中央には三間四面の土蔵造りの駒形堂が西向きに描かれている。天慶5年（942）に平公雅によって建立されたと伝えられる駒形堂は『江戸名所記』2巻「浅草駒形堂」【図28】のように東向きで、以降、元禄時代（1688～1703）までは南向き、寛保2年（1742）の再建時には西向きに建てられたことから、北斎の「馬尽 駒形堂・御厩川岸・

駒止石」(すみだ北斎美術館) や本図は川を背にして建てられた駒形堂の姿が描かれている。本図の駒形堂の右側には、『江戸名所図会』「駒形堂 清水稲荷」と同様に火災によって再建(宝暦9年)された「禁殺碑」が描かれ、駒形堂の後ろあたりに小船が係留されていることから「駒形の渡し」の渡し場を示していることがわかる。



【図28】伝浅井了意/著『江戸名所記』2冊  
(当館蔵 88206190)

6) 大川橋の月 小梅の泊船【図29】、  
其二【図30】

中巻の最後は大川橋(吾妻橋)付近の賑やかな様子を描いた図である(【図5】⑮⑯参照)。対岸に隅田川と北十間川が合流するところに架かる枕橋がみえることから、視点は上流を向いていることがわかる。橋のたもとには、たらいをまわす大道芸人とそれを楽しむ子供たちの様子や、橋番小屋や茶店、御休處でくつろいでいる人々など、江戸庶民が集う風景が生き活きと描かれている。

続く図には仕丁が落ち葉をはき集めている姿を描いている。この「仕丁」を画題にした作品(短冊絵「仕丁」(ベルリン東洋美術館))はいくつか現存するが、本図は体の描き方やほうきの持ち方など、晩年にみられる戯作的な誇張は見られず、いずれも本図の後に制作されたものであると考えられる。

(3) 下巻(浅草寺～吉原)

① 浅草の入相【図31】

下巻は夕暮れの浅草寺本堂の大屋根から始まる(【図5】⑰参照)。図には人物を配さず、正面からみた大屋根を描いている。視点は異なるが、「富嶽三十六景 東都浅草本願寺」【図32】と比べると屋根の角度をやや狭く描き、背後には霞に覆われた樹木と天空を群れ飛ぶ鳥を背景としていることから、季節は秋のはじまりと考えられる。左側に描かれた木はその高さから考えると不自然ではあるが、後図との自然なつながりを持たせるために用いたものであると思われる。



【図32】葛飾北斎「富嶽三十六景 東都浅草本願寺」  
(当館蔵 92202753)

② 向島の時雨 花川戸の参籠【図33】

待乳山聖天、今戸橋付近から対岸の三囲稲荷を眺める図である(【図5】⑱参照)。花見の名所として浮世絵によく描かれる三囲稲荷を描くため、西岸の様子を遠景に取り入れた構図となっている。隅田川

堤から鳥居の頭だけ見えるのが三囲稲荷の鳥居で、その奥にあるのが本社である。

「隅田川向島絵図」【図34】からもわかるように左側にある黄色い屋根の二階建ては川魚料理で有名な平石（葛西太郎）で、さらにその奥に見える二つの鳥居の奥には牛嶋神社が描かれている。三囲稲荷の手前にある小舟は隅田川の対岸にある待乳山下あたりから三囲稲荷前にあった「竹屋の渡し」である。



【図34】「隅田川向島絵図」(部分) 安政3年(1856)  
(当館蔵 86213133)

③ 待乳山の紅葉 【図35】

三囲稲荷の向かい側にある待乳山聖天を東南からとらえた図である（【図5】⑱参照）。待乳山聖天は隅田川に臨み、竹屋の渡しにほど近い小丘にあったことから江戸時代には東都随一の眺望の名所と称され、多くの浮世絵や詩歌などの題材となった。浮世絵において待乳山聖天はその高さを強調して描くことが多く、また周辺の今戸橋や料理茶屋とともに待乳山を含む全体の景色を描く作品が多くみられる。

本図は待乳山聖天を、画面いっぱい捉え、遠景は隅田川と筑波山と思われる山を一部描き、余分な題材は切り捨て、待乳山聖天以外の要素を極力省略しようとしている。また、秋の待乳山聖天は賑わっていたはずだが、その様子は全く描かれず、3人の参拝者と一人の仕丁のみ用いていることから、北斎の意識は待乳山聖天の境内の描写に集中していることがわかる。

前図とつながる手前の鳥居は対岸の三囲神社の鳥居と対称するように描かれ、遠近の対比が際立つ場面となっている。

④ 白髭の翟松 今戸の夕烟 【図36】、橋場の田家 隈田の都鳥 【図37】

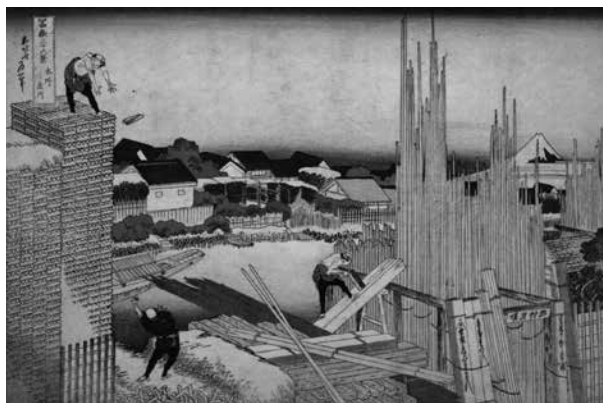
夕暮れの隅田川を背景に今戸の作業場を描く（【図5】⑳㉑参照）。絵地図をみると、対岸に描かれた森は白髭明神社であると考えられ、木立の中には白髭神社の鳥居と思われる小さな鳥居もみえる。船の行き来する隅田川を背景に自然の中で仕事をする職人の姿が柔らかな色調により表現されている。

続く図は雪景色の橋場を描いた場面である。橋場の渡しは西岸に真崎稲荷、東岸に白髭神社があることから、「真崎の渡し」や「白髭の渡し」とも呼ばれた。記録に残る隅田川の渡しとして最も古いとされる橋場は風流な場所とされ、大名や豪商の別荘が隅田川河岸に並び、本図のように料亭も多かった。

隅田川の左側に描かれる2羽の鳥は、『伊勢物語』の都鳥を意識して取り入れたと思われ、右側には北斎が得意としていた高所で瓦葺をする様子が描かれる。後年描かれた「富嶽三十六景」のうち「江都駿河町三井見世略図」【図38】、「本所立川」【図39】、また「百人一首うはか緑説 権中納言定家」【図40】や短冊絵「仕丁」などにも類似した画題を用いていることが確かめられるが、『東遊』「駿河町 越後屋」【図41】にも同様の画題がみられることから、早い時期から好んで描いていた画題であったと思われる。



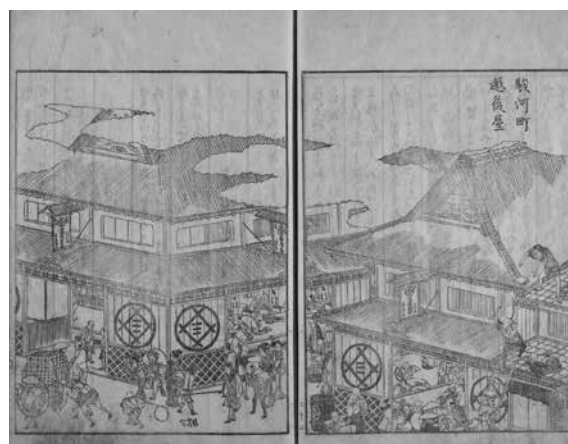
【図38】「富嶽三十六景 江都駿河町三井見世略図」  
(当館蔵 92202763)



【図39】「富嶽三十六景 本所立川」  
(当館蔵 92202779)



【図40】「百人一首うはか緑説 権中納言定家」  
(国立国会図書館)



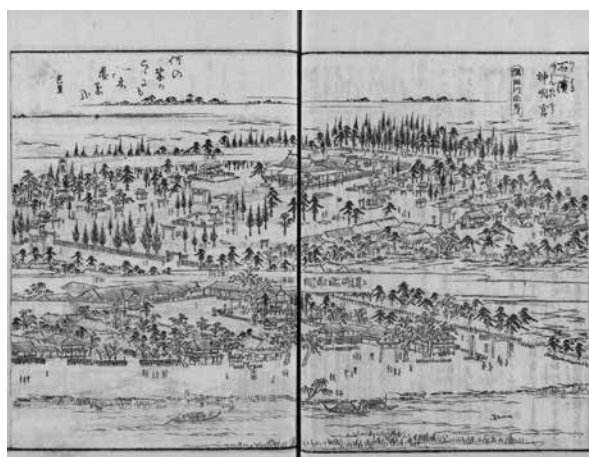
【図41】『東遊』「駿河町越後屋」  
(当館蔵 87201158)

⑤ 真崎の神燈 木母寺の鉦鼓【図42】、三谷の田家【図43】

真崎稲荷と石浜神明宮を俯瞰的にとらえた図である（【図5】②③参照）。遠方には水神社の鎮守の森と思われる景色が描かれていることから視点は上流を眺めている場面である。『江戸名所図会』巻7「隅田川西岸 石浜神明宮 真崎稲荷祠」【図44】からも確かめられるように、二つ並ぶ鳥居の珍しさから浮世絵の画題としてよく取り上げられた。

境内には地上から1m程のところには穴が空いている特徴的な榎が描かれている。この榎から湧いた水を飲むと病気が治るとされ、真崎稲荷を象徴するものとして知られた。

続く図は酒井雅楽頭の下屋敷の隣にあった石浜



【図44】『江戸名所図会』巻7 (当館蔵 91211460)

神明宮で三人の男が鳥居の縄を新しくして新年の準備を行っている。雪景色ではあるが、雪のない屋根の上には梅の花がほころび始めている。後図が隅田川の川岸に位置しない吉原であることから、画面を埋め尽くすほどの霞を用いて空間の転換を示唆している。

⑱ 吉原の終年 【図45】

『絵本隅田川兩岸一覽』の最後を締めくくるのは、新吉原の正月の様子である。左側の2人の花魁の着物は通常遊客に接する時と違う普段着の姿で、その右側には「節季候」と呼ばれた門付け芸人が描かれる。中央に大きく描かれた門松や、狐の面をかぶって笛や太鼓に合わせて踊っている姿など、正月の生き生きとした風情をうまく表している。

おわりに

以上、北斎の『絵本隅田川兩岸一覽』全24図を絵地図や同所を描いた他の名所絵との比較を通して、北斎が描いた隅田川について確認した。おわりに、その特色を改めてまとめておきたい。

まず、隅田川のどの場所を選ぶかという画題の選択についてだが、北斎は『絵本隅田川兩岸一覽』を描くために、西岸から東岸を下流から眺めながら隅田川の名所としてよく知られた場所を満遍なく選んでいることがわかる。隅田川の名所が多く絵師によって描かれ続けてきたことから考えると、北斎の描く『絵本隅田川兩岸一覽』も画題の選択において同類のものであると考えられる。しかし本稿で取り上げたように、特に花見や花火など、隅田川を題材にした絵画によく取り上げられる風物詩については、あえて多く描かず、季節的な題材のみを描くなど、常識にとらわれず自由に選んでいることがわかる。あくまでも場所が主題であり、風物詩は景色を補助しつつも一年を通して見られるというわき役的な存在として扱われていると思われる。

次に構成についてだが、『絵本隅田川兩岸一覽』は北斎の他の作品と比べると極めて条件の多い中で描かれたものであることがわかる。まず一つ目は見開きの場面はそれぞれ完結した場面でありながらすべての図は絵巻物のようにつながっていること。そして二つ目は絵巻物のように左に展開すると同時に隅田川の名所や四季の移り変わりに伴う風物詩も合わせて描かなければならないということである。このように制約の多い中、各見開きの図に新しい名所をそれぞれ取り入れるとなると、前図に描かれた視点や画題を保ちながら描くことになる。そのため橋の向きを正面ではなくやや斜めにするなど構図におけるさまざまな工夫が多く見受けられた。また、必ずしも前図に続く視点の中に名所が位置するとは限らないことから、北斎は近景と遠景の視点をうまく組み合わせながら画面を展開させ、实景をしっかりとらえようとしていることが確認できた。このように視点を最大に変えながら描くことによって他の浮世絵からは描かれない構図も多く取り入れられていると思われる。

北斎の『絵本隅田川兩岸一覽』は、隅田川の名所を真摯に描きつつも、与えられた画面にどのように構成するかを風景画の約束事に捉われず、また、実際の景色を自分の描きたい世界に取り入れようとした北斎ならではの風景画であると言えるだろう。

【註】

- 1) 「武蔵下総両国堺住田河四艘」『類聚三代格』太政官符 承和2年(835)6月29日 大和文華館所蔵(新日本古典籍総合データベース参照)
- 2) 『伊勢物語』9段目「東下り」「名にしおはばいざこととはん都鳥 我が思う人はありやなしやと」国文学研究資料館所蔵(新日本古典籍総合データベース参照)
- 3) 謡曲「隅田川」の梅若伝説に題材をとった歌舞伎、浄瑠璃などの戯曲の総称。古浄瑠璃や元禄歌舞伎に流行し、近松門左衛門作の浄瑠璃「双生隅田川」で大成した。歌舞伎では「法界坊」「清玄」などと結合して複雑になり、長唄「賤機帯」や清元「隅田川」など名曲も多い。日本大辞典刊行会編『日本国語大辞典』11巻(小学館、1985年、p.507)
- 4) 永田生慈「『北斎の狂歌絵本』刊行にあたって」『北斎の狂歌絵本』(岩崎美術社、1988年)
- 5) 『絵本隅田川兩岸一覽』については主に下記の文献を参照した。  
飯島半十郎『葛飾北斎伝』下巻(蓬枢閣、1893年、p.29) なお、鈴木重三校注『葛飾北斎伝』岩波文庫も合わせて参照  
永井荷風『三田文学』第4巻7号(三田文学会、1913年、pp.5-9)  
『荷風全集』第10巻(岩波書店、1992年、pp.469-496)  
織田一磨『浮世絵と挿絵芸術』(万里閣、1931年、pp.57-72)  
檜崎宗重『北斎論』(アトリエ社、1944年、pp.223-226)  
仲田勝之助『絵本の研究』(八潮書店、1977年、pp.99-110)  
鈴木重三『絵本と浮世絵：江戸出版文化の考察』(美術出版社、1979年、pp.213-220)  
安田剛蔵「北斎研究断章その一 摺物〈隅田川兩岸一覽〉の発見」『季刊浮世絵』第83号(画文堂、1980年、pp.17-23)  
『ボストンで見つかった北斎展：ボストン美術館の版本新発見』(東京放送、1987年)  
浅野秀剛監修「北斎決定版」『別冊太陽』(平凡社、2010年、p.112)  
小林ふみ子「北斎画『絵本隅田川兩岸一覽』の刊年をめぐる」『詩歌とイメージ：江戸の版本・一枚摺にみる夢』(勉誠出版、2013年、pp.271-286)  
浅野秀剛「北斎画『絵本隅田川兩岸一覽』の袋と刊年」『浮世絵芸術』169号(国際浮世絵学会、2015年、p.61)  
『葛飾北斎：世界を魅了した鬼才絵師(傑作浮世絵コレクション)』(河出書房新社、2016年、pp.65-68)
- 6) 序文によると題名は「猶味酒の名」によせて付けられたことがわかる。「猶味酒の名」とは浅草雷門前並木町の山屋半三郎店が元祖と言われている「隅田川諸白」のことである。加藤百一「城下町の銘酒(その2)」『日本醸造協会誌』97巻11号(日本醸造協会、2002年、pp.774-782)
- 7) 前掲5) 檜崎宗重『北斎論』
- 8) 前掲5) 仲田勝之助『絵本の研究』
- 9) 前掲5) 小林ふみ子氏の論稿(p.285)は、壺十楼成安については詳しいことは明らかにされていないが、六樹園編『狂歌画像作者部類』(文化8年刊)に「別号壺十楼成安 高橋氏 京師ノ産 東都二住ス 医家」とされていることから、『絵本隅田川兩岸一覽』に京都の人が多数入集しているのは壺十楼成安の出身地の関係であるとしている。
- 10) 前掲5) 小林ふみ子「北斎画『絵本隅田川兩岸一覽』の刊年をめぐる」
- 11) 前掲5) 安田剛蔵「北斎研究断章その一 摺物〈隅田川兩岸一覽〉の発見」
- 12) 前掲5) 小林ふみ子「北斎画『絵本隅田川兩岸一覽』の刊年をめぐる」
- 13) 大阪前川善兵衛版に「画工北斎辰政 彫工安藤円紫 大阪南久宝寺町四丁目前川善兵衛」とあるが、『東都勝景一覽』の奥付を利用し版刻したものであると考えられる。  
前掲5) 菊池貞夫「ボストン美術館で新発見された北斎の板木について」『ボストンで見つかった北斎展：ボストン美術館の版本新発見』、永田生慈『北斎の狂歌絵本』
- 14) 浅野秀剛「1804年の御触書の影響 その2」『季刊 美のたより』No.198(大和文華館、2017年)
- 15) 池田義信『無名翁随筆』「北斎翁の画風を慕い、画則骨法を受けて後一家をなす」(国立公文書館所蔵、請求番号218-0002)
- 16) 談義本・槩下雑談(1755)三「ぼんでんを以て、村中の者の首を撫」
- 17) 前掲5) 安田剛蔵「北斎研究断章その一 摺物〈隅田川兩岸一覽〉の発見」
- 18) 『江戸名所図会』の「榎寺」に、「榎寺駒形黒船町にあり。浄土宗にして増上寺に属す。池中山正覚寺と号す。本尊



【資料紹介】 葛飾北斎の『絵本隅田川兩岸一覽』について 一描かれた隅田川の名所を読み解く― (朴 美姫)

阿弥陀如来は恵心僧都（源信、942～1017）の作にして、開山は観智国師（源誉存応、1544～1620。増上寺二世）なり。往古当寺に、名ある大木の榧ありしゆゑに号とせりといへり。」とある。

【表1】『絵本隅田川兩岸一覽』狂歌師及び狂歌一覽

図版番号	図版	東岸(西岸)	題名	狂歌	狂歌師
【2】		高輪大木戸 (品川宿)	高輪の暁鳥 不峯の積雪	佐保姫のめした霞の袖のうら 一はんからす墨をつけたり	壺墨楼奈良輔
				不二山のおろしだいこにさゝ波の さしみ作れる海の大鉢	歌船亭千網
【9】		江戸湾 (房総半島)	旭元船乗初 房総 春暁	見渡せは霞の網のひきはへて 千万艘のけさの乗初	遊友館春道
				遠つ帆は蝶とも見えてうつ浪の はなの中ゆく千ふね百船	壺玄楼万盃
【10】		稲荷橋 (佃島・住吉神社)	築地の凧 佃住吉恵方	船つくだてうと恵方に真住よし 巳午の間よろつ藤棚	甲羅千人
				春風に入来る帆とも見ゆるなり 築地の沖にあくる袖凧	巖亀子
【11】		三俣(永代橋)	三俣の白魚 永代春風	水の面に糸の白魚あつまれば 浪にかゝりをみつまたの川	金守門
				にきハへる永代橋にやり梅の かほりをたえすわたる春風	鶴毛衣
【13】		新大橋付近 (万年橋、上ノ橋)	市中の花 新寺の新樹	家つとの桜の枝は手折しと あとつけかほに蝶のおひ来る	桐政女
				日の影のもらぬ木立はふくろうの 目も見ゆるかとおもふまくらさ	京 唐橋村雄
【14】		元柳橋 (新大橋)	元柳橋の子規 大橋の網引	波風のなかすのかたはかすみにも 手伝はせたるはるの網引	竹女
				やよ親の音をまなへかし二声と なかすのかたへ行ほと、きす	壺鶯楼可知輔
【16】		両国広小路 (御船蔵)	広小路の群集 御船蔵の蛸	水うちて涼しき門へ笛売の 秋を告たる日くらしのこ糸	京 依藤子
				両国の橋のたもとの夕風は そてから袖へぬけるすゝしさ	貢計舎弁盛
【17】		両国広小路 (御船蔵)	其二	おしあふて足さへ地にはつかぬほと 身もかるわさの芝居にきハふ	三巴園蓬室
				立かハリ茶みせに人のよるまでも きせん群集をなす広小路 川の面は玉や鑑屋を漕ませて 夜るの錦をなす花見船	貢光軒宇寿喜 六月庵峯雪
【19】		両国橋西詰 (一つ目之橋)	両国納涼 一の橋弁天	不二の雪筑波のしけミ両かけに 荷ふてすゝし両国の橋	半月楼鹿手磨
				たのしさの此うへはなしかたひらの 呂をおし通す夕涼舟 江のしまをこゝにうつせし貝屏風 宮の扉をつたふでゝむし	松齋千代住 嘘言皮成
【20】		両国橋 (回向院)	無縁の日中	生滅の時はわかたし人の花 さく両こくの日中の鐘	無心亭
【22】		新柳橋 (御蔵橋、松前伊豆守の屋敷)	新柳橋の白雨 御竹蔵の虹	袖笠をかふる間もなく柳はし みとりの髪もぬるゝ夕たち	梅子
				竹蔵の堀にも虹の影見えて はや両こくの橋かとおもふ	壺山楼高喜
【24】		首尾の松 (石原橋、本所御蔵)	首尾松の鉤舟 椎木の夕蟬	美しさ松は千とせを延あかり 延あかり見る舟のたをやめ	千歌園序文
				時またき見あくる椎の青空に ところ定めず蟬のしくるゝ	全詠
【25】		榎寺(御厩の渡、 阿部伊勢守の下屋敷)	榎寺の高灯籠 御馬屋川岸乗合	しけりあふ色も萌黄のかや寺に 火燭と見ゆる燈籠の影	嘘言皮成
				ろのおとに雁こきませてわたし船 あとのか先へあかるのり合	蜀錦園蔓人

【27】		駒形堂 (大川橋)	駒形の夕日栄 多田葉師の行雁	むらしくれはれ行あとの夕はへに いさむ月毛の駒かたの舟 ものゝふの多田の本尊の名にめてて つらをみたさすわたる かりかね	歌子 貢船窓春風
【29】		大川橋(枕橋)	小梅の泊船 大川橋の月	香に匂ふ小梅の星の名にめて、 はしのたもとにとまる苦舟 三谷ほりさしてこくらし月の船 大川はしの秋のよなよな	延齡堂愛人 霞楽亭花鳥
【30】		大川橋付近	其二	大江戸の自由は月の桂木も 材木かしへよする秋の夜	壺十楼成安
【31】		浅草寺	浅草の入相	よしはらの里のわかれのはしめそと つく浅くさの入あひの 鐘	蜀鶏園広道
【33】		待乳山(三囲神 社、弘福寺、葛西 太郎、竹屋の渡 し)	向島の時雨 花川戸の冬籠	村時雨雫を木へにつたはせて 秋葉の猿は籠ほしけなり 鶯も花かと雪の冬こもり 江戸ふしうたふ助六か宿 真乳山紅葉の日和見定めて 居続はせぬ朝かへりふね 紅葉はのあかりをたて、夕くれは 客をまつちの山の下茶屋	松斎千代住 壺鶯楼可知輔 真筆庵都世喜 貢草庵穴丸
【35】		待乳山聖天	待乳山の紅葉		
【36】		今戸 (白髭神社)	白髭の翟松 今戸の夕烟	十かへりとうち詠めても十八の 君とは見えぬしら髭の松 たえまなき瓦煙に淋しさも しらぬ今戸秋の夕くれ	瑞籬久世 壺琴楼道成
【37】		橋場の渡し	橋場の田家 隈田の都鳥	すめはまた都鳥とて草の戸も 春秋を見る月花の門 夜なへになれてやとにもすみた河 隈なき月のみやこ鳥ま て	青々園 緑亀年
【42】		真崎稻荷神社 (木母寺)	真崎の神燈 木母寺の鉦鼓	小夜しくれふりさけ見れば神垣を ほのかにもれるみつのと もし火 音も氷るはかりにけふはすみた川 雪にうつみし木母寺のか ね	和哥浦汐 遊友館春道
【43】		明神社	三谷の田家	はや春へひとまたきなる大鳥居 しりくめ繩の見ゆる神垣 春を知る三谷の賤か梅こよみ 雪に封して置としのくれ	京 一瀬亭平 丸 壺琴楼道成
【45】		新吉原	吉原の終年	たをやめもめてたく越る年の夜に かしくといけし梅の一と えた 太神楽笛や太鼓の音をそえて 豆まく声のよしはらの里	京 寿ののふ 子 壺山楼高喜